

[テーマ企画：特集 情報構造と名詞述語文]
まえがき

風間 伸次郎

1. 企画に至った経緯

これまでの語研特集では、ヴォイス (含む「受動表現」)、アスペクト、モダリティ、他動性、連用修飾複文、と、もっぱら動詞述語文を中心に扱って来た。唯一「所有・存在表現」は静的述語および名詞句を扱った点でこれらとは若干異なっていた。

残る課題の 1 つは、名詞述語文 (ノコピュラ文) であり、そこには指示性や文の情報構造が大きく関わって来る。したがって今回の特集ではこれを中心にとりあげて特集のアンケート例文を構成した。

まず、日本語による 20 の例文からなるアンケートを作成し、これに答えていただくことによって、各言語のデータを収集することにした。アンケートの構成や意図については、本稿稿末のアンケート本体も参照されたい。

こうして 22 の言語に関するデータが集まった。これは東京外国語大学にある 27 専攻語のうちの 14 言語にフィンランド語、ハンガリー語、ダグール語、ナーナイ語、ソロン語、ラワン語、トルクメン語、グイ語を加えたものとなっている。なおウルドゥー語のデータはヒンディー語のデータとしても活用できるものであり、モンゴル語のデータはハルハ方言とホルチン方言の 2 つ、ダグール語のデータはチチハル方言、ブトハ方言、ハイラル方言の 3 つの方言のデータからなっている。

これらの言語を語族別に見ると、まずドイツ語、フランス語、スペイン語、ペルシア語、ウルドゥー語は印欧語族の言語である。ソロン語、ナーナイ語はツングース諸語、ダグール語、モンゴル語はモンゴル諸語、トルクメン語はチュルク諸語に属するが、これらは (系統ではなく) 構造的な類似などの点からアルタイ諸言語としてまとめられることのある言語群である。フィンランド語とハンガリー語はウラル語族、アラビア語はアフロ・アジア語族、グイ語はコイサン語族の言語である。クメール語はオーストロアジア語族、マレーシア語、インドネシア語はオーストロネシア語族、ラワン語、ビルマ語とともに、中国語は (異論もあるが) シナ・チベット語族、とされている。朝鮮語、日本語は系統的に孤立した言語とされている。今回、アフリカ大陸の言語 (グイ語) のデータが加わったことは、これまでの語研特集で初めてのことであり、真の類型的研究を目指す上での大きな一歩であるといえよう。ただし、なおオセアニア、カフカース、新大陸などの諸言語のデータを欠いているため、本稿での以下に展開される類型論的考察はなおきわめて不十分なものであることは否めない。

2. 焦点標示

下地 (2015) では, Lambrecht (1994) (筆者未見) の枠組みを参考に, 焦点を対比焦点, WH 応答焦点, WH 焦点の3つに分け, 琉球諸方言における焦点標識の出現可能性を調査しこれを次の表のようにまとめている.

表 1: 下地 (2015)による琉球諸方言における焦点タイプと焦点標識の出現可能性(なおスラッシュの前後は, 動詞述語文/非動詞述語文, であることを示している)

	対比焦点	WH 応答焦点	WH 焦点
宮古伊良部	D/D	D/D	D/D
与那国	D/D	D/D	(D/D)
奄美 (湯湾)	D/D	D/	
奄美 (浦)	D/D		

D は上記の諸方言における焦点形式で, 表 1 は D が対比焦点において最も現れやすく, これに次いで WH 応答焦点, WH 焦点の順に現れにくくなっていくことを示しているものである. このことから下地 (2015) は, 次のような階層を提案している.

1) 焦点化階層①: 階層のある地点で焦点標識を使えるなら, その左側の焦点タイプでも使える.

対比焦点 > WH 応答焦点 > WH 焦点

2) 焦点化階層②: 動詞述語文のほうが非動詞述語文よりも焦点標示されやすい (=非動詞述語文で D が出現するなら動詞述語文でも出現する). **動詞述語文 > 非動詞述語文**

このことを検証する目的で, 今回のアンケートに使用した例文が下記の [1]-[10] である (上記に加え, さらに文焦点の例も加えた).

[1] 「えっ, 一郎 [/ 固有名詞なら何でもよい] が来たの?」「いや, 一郎じゃなくて次郎が来たんだ.」【対比焦点 (主語)】(例えば, 昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

[2] 「誰が来た (の)?」「一郎が来たよ.」【WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)】

[3] 「一郎の方が大きいんじゃないの?」「いや, 一郎じゃなくて, 次郎の方が大きいんだよ.」【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

[4] [電話で]「どうした (の)?」「うん, 今, お客さんが来たんだ.」【文焦点 (自動詞文)】

[5] 「あの子供が一郎を叫びたんだって!」「いや, 一郎じゃなくて, 次郎を叫びたんだよ.」【対比焦点 (目的語)】

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど, どっちを買う (の)?」「青い袋を買うよ.」【対比焦点 (目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

[7] 「一郎はどうした?」「一郎は朝からどっかへでかけたよ.」【述語焦点】(例えば, 朝少し遅

く起きて来た一郎の父親が、姿の见えない一郎について母親に尋ねている場面で)

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

[9] [電話で]「どうした (の)?」「うん、一郎が (自分の) 弟を叩いたんだ。」

【文焦点 (他動詞文)】(例えば、電話の向こうで子供の泣き声 that 起きたのを聞いての発話)

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは) 一郎が食べちゃったよ。」

【目的語主題化、主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

2.1. 項焦点の標示

アンケートによる諸言語のデータをみていくと、一般に[7]の述語焦点でもっともデフォルトな文が現れやすく、項焦点や文焦点となると何らかの有標な構文や要素を用いる言語が多いことが分かる (マレーシア語においてのみ、年配者が好んで用いる構文で、焦点部分である動詞句を前置した表現があるとの報告があるぐらいである)。欧米の言語学において伝統的に長らく「主語=主題」であり、ともに“subject”と呼ばれてきたことを考えれば、[7]の述語焦点が一般にデフォルトであるのは納得がいく。意味的にも行為の発信源である「行為者」であり、名詞句階層の左側に位置するものが主語にも主題にもなりやすいことから、やはりそれは納得がいく。Lambrecht (1994) でも述語焦点がデフォルトであるとされている。

そこでまず、これに対する項焦点の方の文の述語に何らかの有標の形式が現れる言語を見てゆく。そこで用いられる手法は、(日本語のノダ文や係り結びとも関連する) 述語の名詞化、もしくは語順の逆転、もしくはその両方である。問題となる例文は、対比主語焦点の[1][3]、対比目的語焦点の[5][6]、Wh 主語焦点の[2]、Wh 目的語焦点の[8]である。

ビルマ語では、動詞の名詞化によるノダ文を用いる。Wh 焦点の[2]と[8]では質問文応答文とも、対比焦点では[1]のみ応答文でノダ文となっている。ラワン語では、[2]の応答文においては分裂文の方が自然であるという。

アラビア語では、対比主語焦点[1]の応答文で、述語動詞句を定冠詞 *li* で名詞化し名詞述語文「ハナーン(こそ)が、来た者だ」としている。Wh 焦点[2]では質問文応答文とも名詞化し語順も転倒させている。対比目的語焦点の[5]では *da* 「それ」を主題とし、「それは、ホセインを叩いたのだ」という文になっている。

中国語では対比主語焦点[1]の応答文で、是 (コピュラ) を用いて節を補語の位置に用いた文を作ることができる。対比目的語焦点の[5]では分裂文を用いた方が自然であるという。

ダグール語では対比目的語焦点[5]で、チチハル方言およびブトハ方言では分裂文、ハイラル方言ではコピュラを用いたノダ文に似た文が現れている。

インドネシア語では、対比主語焦点の[1]の応答文で、Wh 主語焦点の[2]では質問文応答文の両方において、*yang* により節名詞化したものを主語/主題にし、項焦点を述語化している (疑似分裂文)。対比主語焦点の[5]の目的語では応答文で *yang* により選別 (「~の方」という意味、

以下「選別」という用語で呼ぶ)を示し、語順も逆転した文が可能である。対比目的語焦点[6]の目的語では質問文応答文とも、yangにより選別を示すものの、普通の語順の他動詞文を用いる。

マレーシア語はインドネシア語と類似の状況を示し、さらに Wh 目的語焦点の[8]の疑問文・応答文でも疑似分裂文が可能であることが示されている。

スペイン語では対比主語焦点の[1]、および対比目的語焦点の[5]の応答文で分裂文を用いる。Wh 主語焦点の[2]の応答文では語順を VS に転倒している。

ハンガリー語は情報構造の標示に関して敏感であり、独特のシステムを持つ言語だが、ここでは特に、動詞直前位置に焦点を置くという語順の規則と連動した動詞接頭辞の分離／非分離という形式の違いが働く。[1], [2], [5], [6]の質問文、および[3]の疑問文応答文において、焦点である項は動詞直前位置を占める。[1], [5]の質問文ではさらにこの位置を空けるため動詞接頭辞の分離も起きている。

以上が項焦点に際して述語の名詞化等を要求する言語だが、地域や類型に関して特に偏りは見られない。強いて言えば、逆にこれらの言語はデフォルトの動詞形式の動詞性が強く、情報構造に沿った語順の展開を必要とするタイプの言語で、それがために項焦点に際して述語の名詞化等を使用しなければならないという制約を伴っているタイプの言語であるとみることができだろう。インドネシア語／マレーシア語はそうした性格の最も強い言語であるように見受けられる。

特に主語と目的語の違いによって、述語の名詞化等の違いが出るかどうかを見るために、上記の記述の内容を表に整理してみたのが次の表 2 である。なおインドネシア語とマレーシア語では、インドネシア語の記述の内容のみを反映している。

表 2: 項焦点において述語に有標な形式の現れる言語の数 —主語と目的語での違い—

	主語 ([1][2][3])	目的語 ([5][6][8])
動詞・対比質問文 [1] vs [5][6]	2	3
動詞・対比応答文 [1] vs [5][6]	5	4
形容詞・対比質問文 [3]	1	
形容詞・対比応答文 [3]	1	
Wh 質問文 [2] vs [8]	5	1
Wh 応答文 [2] vs [8]	5	2

まず、下地 (2015) が名詞句側につく焦点標識で観察したような、対比焦点>WH 応答焦点 >WH 焦点の階層については、これに類するようなはっきりとした傾向は観察できない。次に、主語と目的語の違いについては、特に Wh 質問文と Wh 応答文のデータにおいて、はっきりと

した違いが見られる。やはり既知の主題主語に関して、目的語が何であるかを尋ねたり答えたりすることの方が、主語が何であるかを尋ねたり答えたりすることよりもはるかに一般的であり、頻度も高く、それがためにデフォルトの述語が用いられるのではないだろうか。

次に、述語の方ではなく、名詞項の方に何らかの標示を行う言語を見てゆく。

明示的な焦点形式を有し、これを用いている言語は朝鮮語のみである。朝鮮語では対比焦点の[1]および Wh 焦点の[2]で質問文応答文とも主題形式でなく主格形式を用いる。これにより項焦点が示される。

朝鮮語以外の SOV 語順の言語には、定対格と不定対格の対立をもつものが多くあり、対比目的語焦点の[5][6]および Wh 目的語焦点の[8]では、定の目的語の形式が用いられる。この定の形式は、主題とも焦点ともなりうるものであるが、さらにおそらくはプロミネンスを伴うことによって、焦点を示しているものと考えられる。特に対比の[5][6]においては、名詞の側に何らかの選別形式を用いている言語が多く存在する。

このようなタイプの言語は、ペルシア語、トルクメン語、ダグール語、モンゴル語、ナーナイ語、ソロン語であり、これらはもっぱら SOV 語順を示すアルタイ型言語である。

ペルシア語では[5], [6], [8]の質問文応答文とも、定対格を用いる ([5]の応答文では任意)。[6]の質問文の疑問詞に接尾辞形人称代名詞 (必須) を付して選別を示している。トルクメン語では[5], [6], [8]の応答文で定対格をとる。「どちら」は3人称の所属をとるが、これには選別的機能があると思われる。ダグール語では、[6]において質問文応答文とも、疑問詞とその答えの焦点に3人称所属を付して選別を示している。モンゴル語では[6]において質問文応答文とも、疑問詞とその答えの焦点に3人称所属を付して選別を示している (ホルチン方言の[6]の応答文を除く)。[6], [8]の質問文応答文とも、動詞直前の位置であっても定対格や再帰などの形式を用いる (ホルチン方言の[6]の質問文を除く)。ただし[5]のハルハ方言の応答文では対格が用いられていない。ナーナイ語では[5], [6], [8]の応答文で対格や再帰人称をとる。

ソロン語では[6]において3人称所属接辞によって選別が示されている。[8]では再帰要素が定の目的語であることを示す。

上記の言語群は、述語の側にせよ、名詞の側にせよ、何らかの積極的な表示により、項焦点を示そうとするタイプの言語であった。これに対し、いわば消極的な方法として、応答文において焦点の名詞項のみを発話する言語がある。

フランス語では対比焦点の[1]の応答文では主語のみ、Wh 焦点の[2]の応答文でも主語のみもしくは It is Ichiro 型となる。スペイン語では Wh 焦点の[2]および[8]の応答文は主語のみ、目的語のみでもよい。フィンランド語では[1]の応答文では It is not A but B 型の表現で述語は非出現であり、[2]の応答文でも述語は非出現である。ラオ語とハンガリー語では[1], [2], [5], [6], [8]の応答文はどれも主語/目的語のみでよく、クメール語では[1]の応答文は主語のみでよい。ウルドゥー語では[8]の応答文において主語が非出現で、[6]の応答文は主語も動詞も非出現でよい。ダグール語プトハ方言では[1]や[8]の応答文が主語のみであり、ナーナイ語では[2]の応答文が主語

のみでよいという（ただし媒介言語のロシア語に誘導された可能性がある）。

このように、述語の方を非出現（省略とは考えたくないで、「省略」という用語の使用を避けている）にできる言語は、名詞の持つ述語的な性格が強く、亀井・河野・千野（編）（1996）がいうところの両肢型言語であると考えられる。上記の言語にはウラル語族の言語を含むヨーロッパの諸言語および東南アジアの孤立語が多く現れていることがわかる（なお、スペイン語、ラオ語など、主題主語が現れない言語もあるが、これもヨーロッパの印欧語と東南アジアの孤立語の組み合わせとなっている）。これに対し、述語の名詞化や名詞側での定対格の表示を用いる言語は、述語の非出現が許容されないタイプであり、亀井・河野・千野（編）（1996）がいうところの単肢型言語であると考えられる。

このことについて、日本語を例に少し考察してみたい。日本語で[1]の調査例文における「えっ、一郎 [／固有名詞なら何でもよい] が来たの？」という質問文に対し、「いや、一郎じゃなくて次郎（だ）。」と答えると、また[9]の「どうした（の）？」に対して、「うん、一郎が（自分の）弟（だ）。」とコピュラ文によって答えるのはきわめて不自然である。もしくは述語を非出現にして名詞項のみを残し、「いや、一郎じゃなくて次郎が。」もしくは「うん、一郎が（自分の）弟を。」などと答えるのはきわめて舌足らずな、何か途中で発話をやめたような印象を伴う。なお名詞項のみで答えられる言語の場合、それが *Jiro (came)* の（ ）部分の省略を通じて生じたのか、*(It is) Jiro* の（ ）部分の省略を通じて生じたのかという問題がある。おそらく *(It is) Jiro* から生じたものと考えたいが、今後の研究によりさらに下位の類型を立てるべきものかもしれない。

以上に見てきたように、項焦点の表現に関しては、大きく分けて3つの類型（述語有標型、項有標型、述語非出現型）があるものと考えたい。

2.2. 項焦点における動詞述語文と非動詞述語文の違い

先に提示した2つの問題点のうち、1) 焦点化階層①（階層のある地点で焦点標識を使えるなら、その左側の焦点タイプでも使える。対比焦点>WH 応答焦点>WH 焦点）については、名詞側にはっきりとした焦点標識を用いる言語が朝鮮語のみであったため、残念ながら今回のデータでは十分に検証することができなかった。

そこでここでは、もう1つの仮説である2) 焦点化階層②（動詞述語文[1]>非動詞述語文[3]）について検証してみることにする。動詞述語文と非動詞述語文で違いがあるという記述があったのは下記の3言語である。

インドネシア語：疑似分裂文は形容詞述語では不自然

マレーシア語：形容詞述語では疑似分裂文を用いなくともよい。

スペイン語：形容詞述語では分裂文は自然ではなく、逆転した語順も用いられない。

このようにどの言語でも、形容詞述語文の方が情報構造の違いに無頓着である。形容詞の方

がアスペクト的に恒常的であって、すでに名詞述語文に近い性質を持っているために述語の名詞化が不必要なのだろうか？ともあれ、この結果は「焦点化階層②：動詞述語文のほうが非動詞述語文よりも焦点標示されやすい」という上記の仮説に沿ったものとなった。

2.3. 文焦点の標示

文焦点に関する諸言語のデータ（調査例文の[4], [9]）をみると、全体的にどの言語でも存在文のストラテジーを用いて文焦点であることを表現しようとする傾向が観察される。基本語順の類型論的なタイプによってもこのストラテジーには大きな違いがあり、基本語順がSVO語順の言語においては、文焦点の文がかなり有標な形態を示すことがわかった。

まず存在文のストラテジーをとるのは下記の諸言語である。中国語は厳密には存在動詞を用いていないが、VS語順は中国語学でいう「存現文」で用いられるので、ここで取り上げる。ドイツ語もスペイン語やフランス語と対照すればよくわかるが、存在文とのつながりを持った構文として位置づけることができるだろう。

アラビア語：[4]の問いで不定の主語のみを取る *fi*：「在る」を用い、主語は後置する。応答文でも不定の名詞「客」は後置される。ただし[9]の答えはSVO語順のままである。

インドネシア語／マレーシア語：[4]の問いでも答えでも *ada* 「在る」を用いて主語は後置する（複雑存在文と呼ばれる）。インドネシア語で[9]の答えはSVO語順のままだが、*itu...*、「その」などで文を始める（つまり「状況的な主題」を伴う）。

ラオ語、クメール語：[4]応答では「在る」を文頭に用いるが、その後は「客 来る」とSV語順。ただし「客」は「在る」の目的語をも兼ねているのかもしれない。

中国語：[4]の応答文ではVS語順である。Sは「一」を伴わない類別詞とともに用いられている。[9]では是（コピュラ）の後に節を続けるか、回想を示す来着を後続させている。

スペイン語：[4]の応答文では *ha ~ (has ~)* を文頭に用い、後続する節全体を新情報にしている。*que* をさらにその前に用いて理由の説明としている。

フランス語：[4]の応答文では *Il y a ~ (It is ~)* を文頭に用い、後続する節全体を新情報にすることを可能にしている。[9]ではSVOのままだが、導入句を用いている。なお *Il y a ~* は存在文に用いられる形式であるが、このような応答文でのそれは *It is ~* のようなグロスによって解釈されている。

ドイツ語：[4]の応答文では *Es ist ~ (It is ~)* を文頭に用い、後続する節全体を新情報にすることを可能にしている（ただしドイツ語の存在文は *Es gibt ~* のような形式となる）。[9]ではSVOのままだが、主語に第2アクセントを置き、全体が新情報であることを示している。

このように存在文もしくはそれに準ずる構文要素によって文焦点を表現する言語は、アラビア語を除けば東南アジアの本来的な孤立語、もしくは屈折を失って孤立語化してきた印欧語で

ある。孤立語的な特徴は SVO 語順を要求すると言われている。SVO 語順では、V の前の位置が主題のおかれる位置となっており（ただしドイツ語では定形第 2 の規則があるように V の前は主語とは限らないが）、そのためにデフォルトの文では文焦点が表現できず、存在文もしくはそれに準ずる構文要素の使用が必要になるものと考えられる。またこれらの言語群は先の項焦点の節で、述語の非出現が可能であった言語群と大きく重なっており、両肢型の言語という観点から説明することもできよう。

これに対し、特に特別な構文要素や語順を何も必要とすることなく文焦点を表現できる言語は、下記のようにどれも SOV 語順のアルタイ型言語である（ハンガリー語（語順自由）、フィンランド語（SVO 語順）を除く）。ただここでもやはり文焦点にするため、存在文に観察されるような特徴が現れている。すなわち、時や時間を示す名詞項が主語項に先行するという特徴である。朝鮮語、モンゴル語ハルハ方言、ペルシア語、ハンガリー語、ウルドゥー語では、[4]の応答文の文頭に「今」が現れている。フィンランド語でも、nyt「今」に節を後続させると「事実を強調する」という。トルクメン語では「家に」、ダグール語では「うちに」が主語に先行し、文頭に現れている。ただしハンガリー語は先に述べた接頭辞の非分離も文焦点の標示の役に立っている点に注意する必要がある。これらの言語は、時や時間を示す名詞項を主題とすることによって、それ以降の文全体を焦点にすることを可能にしているものと説明できよう。さらに言えば、これらの言語は単肢言語であり、主語項や目的語項と時や時間を示す名詞項などは全て等価であることがこうした表現形態の後ろ盾となっているとみることができよう。

他に、文焦点を示すため存在文的なストラテジーを用いる以外に、主語が新情報であることを示す要素が観察される言語がある。まず朝鮮語では、[4], [9]とも主語には -i「が」がつき、主題を示す -(n)um はつかない。ラワン語でも、[4], [9]いずれにも主題化の要素は現れない。ウルドゥー語では、[4]の応答文において、ek「1」を「客」につけている。ハンガリー語でも[4]で「1」に由来する不定冠詞が現れている。やはり不定であることを示すためか、ナーナイ語やグイ語では[4]の「客」を示すのに「人」を用いている。これらは文焦点を示すために補助的に機能しているものと考えられる。

2.4. [10]の応答文における目的語主題化の手法

項焦点の節で考察したように、デフォルトな文はおそらく[7]の述語焦点であり、これがもっともデフォルトな文形式で現れるが、次いで目的語焦点の文もかなりふつうにデフォルトの文形式で現れる。これは裏を返せば、目的語焦点は情報構造的には一般的なものであることを示していると考えられる。

これに対し、[10]の調査例文では目的語が主題となっているので、情報構造的には有標の文となることが考えられる。この節では目的語主題化に際し、諸言語がどのような表現を取っているかを観察する。

まず態の転換を行う言語がある。態の転換には形態的に明示的な標示要素が現れ、構文も変

わるという点でもっともドラスティックな手法であるといえよう。態の転換が見られたのは、インドネシア語（動詞接頭辞 *di-* による）、ソロン語（使役、ただし媒介言語の漢語に誘導された可能性がある）であった。インドネシア語は、項の焦点化でも疑似分裂文を要求し、目的語主題化においても態の転換を要求するので、何より情報構造を第一に構文を組み立てる言語であるといえるだろう。言い換えると、**topic-comment** もしくは **topic-focus** の順に従う語順の制約がきわめて強く、そのために種々の手法を用いなければならない言語ということになる。裏を返せばこの言語の態は、情報構造の標示としての機能を強く持っていると言えるだろう。

次に、（代名詞化なども伴って）語順を転換するタイプの言語には次のようなものがあった：ドイツ語（OVS に）、フランス語（付属語の代名詞にして SOV に、もしくは左方転移して主題化し、その後に *ce* で受けて分裂文を続ける）、スペイン語（弱勢代名詞にして SOV に）、中国語（OSV に）、モンゴル語ハルハ方言（O, SV に）、ペルシア語（代名詞接尾辞形にして SVO に）、ナーナイ語（OSV に）、トルクメン語（OSV に）。

イタロ諸語などは、付属語の代名詞などによって、代名詞を形態的にみてより軽い形にすることによって、基本語順とは異なる語順を実現していることがわかる。全般に主題の目的語を文頭へ、そうでなくとも SVO から SOV へと、目的語をより前へと移動しようとするが、ペルシア語だけは文末に移動している。なおハンガリー語では、接頭辞を分離せず、目的語は非出現になっている。ハンガリー語には定活用というものがあり、動詞が定活用になっていることによって、定の目的語が存在することが明らかになる。ここでもこの定活用の存在が機能していると考えられる。

名詞の側に特別な要素を用いる言語には次のようなものがあった：ダグール語チチハル方言（定対格?の使用）、朝鮮語（主語に *i* 「が」を用いることによって、非出現の主題の存在を暗示）、ウルドゥー語（完了の文の主語に能格を用いることによって、非出現の主題の存在を暗示）、トルクメン語（定対格の使用）。これらは名詞の側に文法要素を標示しようとする従属部表示型（*dependent-marking*）の言語である。

なお[10]の応答文で、主題化した目的語は現れない言語もあった。これは主題の継続性の問題である。これについては 4 節で取り扱う。

2.5. 分裂文

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこのリンゴだ。」【分裂文】

まずこの調査例文だけではやや不自然で、もう少し工夫すべきではなかったかという点が反省される。ドイツ語のデータには、この調査例文では自然な文が得られなかったという報告があった。2つ以上のリンゴがあり、「こっちの方が～」などという文にして、もう少しこうした文が発話される状況をていねいに規定しておくべきだったかもしれない。

さて、分裂文に関しては次のようなタイプの諸言語が観察された：

- ①分裂文を使用するタイプの言語群. ヨーロッパの印欧語族の言語に多く観察される.
- ②疑似分裂文を使用するタイプの言語群. 東北・東南アジアの言語に多く観察される.
- ③分裂文を嫌うタイプの言語群. アルタイ諸言語に多く観察される.
- ④分裂文およびそれに類する操作をほとんど必要としないタイプの言語群.

①に属する言語は、ドイツ語、フランス語、フィンランド語で、英語と同様に長い主語を避け仮主語を置くことによって分裂文を作っている。スペイン語は仮主語が不要で、いきなりコピュラから始まっているが、同じタイプと考えてよいだろう。ハンガリー語でも関係代名詞が用いられている。ここには統語的な要請から、SVO 語順への制約がある言語が主に属するものと考えられる（ただしハンガリー語は語順自由）。

これに対し、②に属する言語はウルドゥー語、ペルシア語、ビルマ語、ラワン語、ラオ語、クメール語、インドネシア語／マレーシア語、中国語、朝鮮語である。

ウルドゥー語の疑似分裂文は、主要部が不要の、物主代名詞型関係節で、ポーズの後、指示詞で受けなおしている。中国語でも主要部の本は関係節に同格で繰り返され、コピュラの後にも現れている。

インドネシア語／マレーシア語も同様であるが、イントネーションによってコピュラが不要になっている。これらの言語ではさらに語順を倒置した文も可能である。ビルマ語、ラワン語では名詞化標識（データ中のグロスではNC）によって節全体を名詞化し主語としている。

ペルシア語では、「物」という名詞に関係節を後続させて形成する。朝鮮語も、日本語に似ているが、形式名詞でなく *kes* 「もの、こと」を用いている。

ラオ語では孤立型の言語らしく、名詞化や関係節化がなく、節はいきなり主語名詞としてコピュラの前に現れている。クメール語は「1」に関係節を後置した疑似分裂文である。

少し変わっているのがアラビア語で、特に名詞化や関係節化を必要とせず、節に冠詞をつけるだけで全体が主語となり、単なる名詞述語文で分裂文相当の文を形成できる。

③に属する言語はトルクメン語、ダグール語、モンゴル語、ナーナイ語、ソロン語である。トルクメン語で分裂文は嫌われ、連体節を「本」に使用し、「これは私が・買って来た本だ。」のように表現する。ダグール語とモンゴル語も分裂文は作りにくく、話者は作らないという。分裂文における表現意図は、ふつうの動詞文にプロミネンスを用いることによって表現される。ダグール語ハイラル方言およびモンゴル語ハルハ方言で調査者が作文して確認した文も「～した本はこれだ」型の文になっている。ナーナイ語でもやはり分裂文は嫌われるが、作文すれば許容される。ソロン語で話者が最初に作例したのは、やはり動詞文で、焦点要素を右方転移し

た文であった。分裂文も作例したが、その際形動詞には3人称の所属人称が用いられて分断（以下では、情報構造における主題（topic）と題述（comment）の切れ目を「分断」と呼ぶことにする）を示している。

これらの言語の形動詞には名詞的機能があるが、これによって節を主語にするのは難しいようだ。これは、形動詞には修飾的（／連体的な）な機能もあるために、後続する要素があるとそれに係っていこうとするためであると考えられる。

なおグイ語において関係節は使われているが、「これは私が～買って来たオレンジだ」のような文になっている。もしくはふつうの動詞文が用いられるという。グイ語をどのグループに位置づけるべきかの判断は筆者には難しいが、暫定的に②のグループの言語とすることを提案しておく。

④に属する言語はロシア語である。今回の調査対象の言語には含まれていないが、ナーナイ語を調査するための媒介言語としてネイティブに作成していただいた調査例文を見ると、この言語では分裂文が不要であることがわかる。これは豊富な形態変化が可能にしたこの言語の自由な語順によって、情報構造が示されるためであると考えられる。逆に言えばこの言語で語順はもっぱら情報構造の表示に用いられるといってもよいだろう。

3. コピュラ文における諸問題

西山 (2003) は意味論および語用論に基づいたコピュラ文の包括的な研究である。そこでは、指示性・非指示性、および飽和性／非飽和性という観点から、日本語のコピュラ文を下記のよう

表3：日本語のコピュラ文の分類（西山 (2003: 122)による）

	「AはBだ」	「BがAだ」
1.	措定文「あいつは馬鹿だ」	／
2.	倒置指定文「幹事は田中だ」	指定文「田中が幹事だ」
3.	倒置同定文「こいつは山田村長の次男だ」	同定文「山田村長の次男がこいつだ」
4.	倒置同一性文「ジキル博士はハイド氏だ」	同一性文「ハイド氏がジキル博士だ」
5.	定義文「眼科医（と）は目のお医者さんのことだ」	／
6.	／	提示文「特におすすめなのがこのワインです」

コピュラ文の分析に用いる例文は下記である。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」【措定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置同定文】

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【同定文】

[15] 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

ここではまず、措定文と同定文において、コンピュータや文の構造が同じであるのか異なっているのか、に注目する。

今回の調査対象の言語には含まれていないが、例えばハワイ語では措定文と同定文において、異なったコンピュータを用いることが知られている。今回の調査対象となった言語では、ラオ語、クメール語で異なったコンピュータが用いられることがわかった。ラオ語では、おおざっぱに言うと同定文に *pɛn*, 同定文に *mɛɛn* が用いられる。この調査例文では、[13]には *mɛɛn* のみ、[12], [14]では上記のどちらを意図しているかについての「話し手の発話意図」に拠って使い分けられるようである。クメール語では *cəə* と *kuuŋ cəə* が[12]に対する[13]と[14]という形で、明確に使い分けられている。なおスペイン語では[12]-[15]のような名詞述語文ではすべて同じであるものの、形容詞述語文ではそのアスペクト的な違い（すなわち、一時的か恒常的か）によってコンピュータの使い分けられることが知られている。今後のさらなる研究を必要とするが、こうした違いは、言語によって線を引く位置に違いはあっても、最終的にはアスペクトなどに関する連続した線上に位置づけられるものではないかと考える。

次に、コンピュータ以外の違いについてみると、まず措定文のほうが有標であるのはインドネシア語であり、*seorang* 「1」による不定化が行われる。他方、同定文のほうが有標であるのはアラビア語、ビルマ語、ペルシア語で、冠詞などによって違いが現れる。

上記以外の言語では、措定文と同定文に明確な違いは観察されなかった。

次に、同定文がどのような形式で成立しているかに注目する。今回の調査で使用した同定文[14]は、焦点が前に来ているという点でやや特殊な（有標な）文であると考えられる。したがって、こうした文はデフォルトの文形式では表現しない（もしくはできない）言語があると考えられる。

この点に関してもその対処の仕方は言語のタイプによって異なるようだ。まずアラビア語において、同定文では代名詞が分断する形をとっている。インドネシア語／マレーシア語では語順が逆転し、旧情報が前に移動している。グイ語でも逆転した語順を用いるようだ。

これらの言語に対し、従属部表示型（dependent-marking）のいわゆるアルタイ型の言語では、格など名詞側に現れる要素により有標なものを用いている。朝鮮語では主題助詞でなく主格助詞 *-i-ga* を用い、ビルマ語では主格助詞 *kâ* が必須となる。ダグール語では *utkaa* 「すなわち」

や3人称所属により分断を行っている。

上記以外の言語では、特に特別な形式は現れていないように見えるので、プロミネンスによってその表現意図を達成しているものと考えられる。特に中国語のデータにはその点についての（プロミネンスについての）記述がある。

4. 主題の継続性(すなわち, pro-drop 言語の可能性)

ここでは、[12]および[10]の例文のもう一つの意図である、主題の継続性についてみる。

以下にその結果によって言語を分類して示す。

・[12]で主題主語が継続可能で、現れなくともよい言語：インドネシア語（口語で）／マレーシア語、ダグール語、ビルマ語、朝鮮語、モンゴル語、ラオ語、ソロン語、ラワン語、ペルシア語（動詞には一致）、ナーナイ語（動詞には一致あり）、トルクメン語（動詞には一致あり）、ウルドゥー語（動詞には一致あり）、スペイン語（動詞には一致あり）、ハンガリー語（動詞には一致あり）、グイ語

・[12]で主題主語が継続不可能で、その出現が必須な言語：中国語、ドイツ語、フィンランド語、クメール語（?）

・[12]で2文目が別主語で判定が不能な言語：アラビア語（動詞に一致）、フランス語（節内にはあり）

・[10]で主題目的語が継続可能で現れなくともよい言語（もしくは少なくとも現れていない言語）：ハンガリー語、インドネシア語（-nya をつけ、定で現れてもよい）／マレーシア語、ダグール語（プトハ、ハイラル方言）、ビルマ語、朝鮮語、モンゴル語ホルチン方言、ウルドゥー語、ラワン語、ラオ語、クメール語

・[10]で主題目的語が継続不可能で、その出現が必須な言語／（少なくとも例文で）出現している言語：アラビア語、ドイツ語、フランス語、中国語（「省略しにくい」と記されている）、トルクメン語、[以下は非出現不可であるかは明らかではないが、少なくとも出現している言語]フィンランド語、ペルシア語、ナーナイ語、モンゴル語ハルハ方言、スペイン語、ソロン語、グイ語

上記の[12], [10]の結果を見ると、主語目的語に関わらず、その継続可能性は言語によって一貫した傾向を示すことが分かる。アジアの言語は継続可能なのが一般的であり、ドイツ語やフィンランド語は一貫して継続不可能である。ただしフィンランド語と同じウラル語族の言語であっても、ハンガリー語では一貫して継続可能・非出現である。

なお主語の場合と目的語の場合で若干条件が異なっている点に注意しておく必要がある。目的語の主題では、疑問文の主題としての目的語を引き継ぐかどうかであり、主語の主題では同じ話者の連続する発話間で主語を引き継ぐかどうかである。

5. 定義文

日本語で、定義文が「眼科医（と）は目のお医者さんのことだ。」や「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」となっているのをみるとわかるが、形式的な面からみても、若干単純なコピュラ文とは異なっていることが分かる（単純なコピュラ文なら、「眼科医は目のお医者さんだ.」、「あさってはあしたの次の日だ.」となる）。まず①述語が「～のことだ」となっていて、「～を意味する」に近い意味を実現している、次に②「～とは」「～っていうのは」などの引用形式によって主題を提示している。①に関して、筆者の内省では、「眼科医とは目のお医者さんだ.」としても成り立つが、若干文語的で、説明的な感じ、もしくは当然であるという感じがする。②については、ふつうのコピュラ文とは違い、定義文の主題は聞き手にとって意味不明のものであるため、上記のような引用形式は、その音形を問題にしているということを示すとともに、聞き手の注意を引く働きをしているように思われる。

他の言語における状況を整理するため、①–②の順でみていく。

まず①については、(A) コピュラ文がそのまま使える言語、(B) 「意味する」という動詞を使う言語、(C) 「言う」という動詞を使う言語、(D) 「なる」という動詞を使う言語、が観察された。なお（ ）内に示した言語は、データの文はそうになっていないが、コピュラ文で表現できるとの記述があった言語である。

(A) コピュラ文がそのまま使える言語：ドイツ語、ダゲール語チチハル方言、ナーナイ語、クメール語、グイ語、ハンガリー語、(アラビア語)、(フィンランド語)、(朝鮮語)、(スペイン語)

(B) 「意味する」という動詞を使う言語：アラビア語、フィンランド語、スペイン語、グイ語

(C) 「(～のことを) 言う」という動詞を使う言語：中国語、フランス語、朝鮮語、トルクメン語、ラワン語

(D) 「(～に) なる」という動詞を使う言語：ペルシア語

この①に関して、特に際立った地域的、もしくは系統的偏りは見られない。強いて言えば、フランス語を除き、「言う」という動詞を使う言語はアジア側に多いように思われる程度である。

アラビア語の「意味する」という動詞が不変化であることは興味深い。そこで問題となる語はアラビア語を理解する聞き手にとっても何しろ意味も分からない語であるので、その名詞の性や可算／不可算といった性質も分からないケースが多いだろう。相手が子供などでない限り、外来語や、新語である可能性も高いだろう。したがってこれに応じる語は不変化とならざるを得ないということが考えられる。

次に②についてみると、(P) 「言う」の類で主題化するタイプ、(Q) 指示詞を用いるタイプ、(R) 副詞を用いるタイプ、(S) その他、が観察された。(Q) のタイプのインドネシア語／マレー

シア語とラオ語のものは、地域的にも近いが、その機能もよく似ているように思われる。

(P) 「言う」の類で主題化するタイプ

朝鮮語：-lan mal-i-ci 「という言葉だが」を用いる。

モンゴル語：ge-dAg 「～というもの」を用いる。

ダグール語ハイラル方言：gel-g-sini 「～というもの」を用いる。

ビルマ語：shò-tà節「～というの」で主題化する。

グイ語：「～というの」とする。

ラワン語：「～というの」とする。

(Q) 指示詞を用いるタイプ

インドネシア語/マレーシア語：itu を用いて「(その) ～というの」(先行する名詞句の指示対象を発話行為参加者に何らかの関係があるものとして扱う) とする。

ラオ語：とりたて機能の指示詞 hàn を用いる。

フランス語：ça を用いて「その～ (というものは)」とする。

なお①の言語だが、ハンガリー語でも指示詞が用いられている。

(R) 副詞を用いるタイプ

中国語：「是」に副詞を用いて「就是」とする。「就」が無くてもよいかは不明。

ダグール語プトハ方言：副詞 utkai を用いる。utkai が無くてもよいかは不明。

(S) その他

ソロン語、モンゴル語ホルチン方言：「なら」を用いる。

ウルドゥー語：「～の意味 (であるのは)」とする。

モンゴル語やダグール語では、主題化に2人称起源の要素が用いられるが、これも聞き手の注意を引くという機能、もしくはマレーシア語で「先行する名詞句の指示対象を発話行為参加者に何らかの関係があるものとして扱う」として説明されている機能と関連があるのではないかと思われる。

6. ウナギ文

時崎 (2002) は英語でも補語が定であればうなぎ文が成立することを述べ (A: Let's see, sir. You're the black coffee with sugar? B: Right. C: I'm the coffee with cream and sugar, Beetle), さらに逆行うなぎ文 (I'm the ham sandwich: the quiche is my friend.) も取り上げている。冠詞のないロシア語でうなぎ文が成立しにくいことにも触れている。

それ以外の言語について、うなぎ文の成立の可否を通言語的に広く調べたものは管見の限りない。うなぎ文に関する調査例文は下記である。

[16] [何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて]「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

[17] [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに]
「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

以下に諸言語のデータの分析結果を示す。

最も自然に（逆行）ウナギ文が用いられるというデータが得られたのはインドネシア語／マレーシア語と朝鮮語，さらにモンゴル語ハルハ方言である。Kalau saya, copi. (if I, coffee)のような文が得られ，if にあたる要素が主題提示に用いられるとされていることも興味深い。日本語のハトバの起源的なつながりやモンゴル語の bol (<「ならば」のような形式から，条件にも主題提示にも用いられる)などとの関連からも注目される。Haiman (1978) は Conditionals are topics というタイトルの論文であり，条件と主題の関連が指摘されている。インドネシア語では逆行ウナギ文についても類似の文が提示されているが，イントネーションは異なるという。たしかに日本語でも，「ご注文は？」「私（は） コーヒー。」「私は紅茶。」のようなウナギ文のケースと，「コーヒーはどなた？」「**コーヒーは私**。」というような逆行ウナギ文のケースを考えると，両者（太字の部分）には違いがあるように思われる。すなわち，前者では対比を強く意識して発話しない限り全体が新情報のようなイントネーションで発話され，その場合ハは現れない方が自然であるような気がする。他方，逆行ウナギ文の方は，対比のニュアンスがあり，ウナギ文のケースにおける二人目の発話（「私は紅茶。」）と同じイントネーションになるように思われる（以上は内省による思弁的な考察に過ぎず，今後の実証的研究による適切な裏付けが必要である）。

なお朝鮮語の場合，名詞止めにより表現され，コンピュータを用いると「わたしはいつも／今日もコーヒーだ」のように習慣や反復を表す文になるという。日本語でも上記のように「私コーヒー」のような無助詞でダもない方が自然であるように思われる。やはり筆者の内省によると，「私はコーヒーだ。」は中年以上の男性ならウナギ文で通じそうであるが，「私はコーヒーです。」という，上記の朝鮮語のコンピュータ文のようなニュアンスが生じかねないように思われる（「私はコーヒーなんです。」とすればはっきりする）。フランス語の記述にある「je suis très café 私はかなりのカフェ愛好者だ」という表現と合わせて興味深い。コンピュータ文が本来持っているアスペクトの恒常的な性格の問題と考えられる。マレーシア語やモンゴル語ハルハ方言でも，（逆行）ウナギ文は成立するものの，コンピュータ (adalah/ialah, baj) は用いることができないという。

次に，ウナギ文は成立しないが，逆行ウナギ文に限っては成立する，とされた言語がいくつか見られた。まずラオ語では「(コーヒーは) 私だ。」のような文が可能であるという。インドネシア語でも逆行ウナギ文で自然な文とされていたのはこれ (Saya. 「私だ。」) であった。ペルシア語およびラワン語も逆行ウナギ文の方は可能であるという。なおこの時ペルシア語で，述語の man 「私」が 1 人称の接辞を取ることは興味深い。なおラワン語の逆行ウナギ文では明示的なコンピュータが現れている点に注意したい。フランス語の Le café, c'est moi. も逆行ウナギ文

に近い文とみることができよう。

反対に、ナーナイ語では逆行ウナギ文は使えないが、ウナギ文は可能であるとのことであった。これは補語の方に主格の形式が現れることが問題であるのかもしれない。

ビルマ語ではいちおう（逆行）ウナギ文が用いられるが、「自然な表現とは言いがたい」とのことである。グイ語はウナギ文のデータはないが、逆行ウナギ文について、それに近い文が成立しているようである。

次に特に（逆行）ウナギ文が成立しない言語について、その代わりにどのような文が使われるのか、をみると次のような2つの表現が用いられている：①動詞文を用いる、②前置詞句（特に for me のような）／格変化形を用いる、である。さらに特に逆行ウナギ文の方では、③属格等を用いた「私の（もの／ところ）」のような表現を用いる言語も多くみられた。

- ① 動詞文による：アラビア語、中国語、ダグール語、フィンランド語、ハンガリー語、ドイツ語、ラオ語、ナーナイ語、ペルシア語、ソロン語、トルクメン語、ウルドゥー語、モンゴル語ホルチン方言、ラワン語、クメール語
- ② 前置詞句（特に for me）／格変化形を用いる：フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ナーナイ語、スペイン語、トルクメン語
- ③ （特に逆行ウナギ文の方で）私の（もの／ところ）：アラビア語、ハンガリー語、中国語、ダグール語ブトハ方言、ソロン語、トルクメン語、ウルドゥー語

フィンランド語を含むヨーロッパの言語で、前置詞句（特に for me）／格変化形を用いた表現の使用が顕著であることが分かる。

7. 内心構造と外心構造

風間 (2012) はコピュラ文の諸相を通言語的に概観した1つの試みである。

以下は引用である。

具体的には形容詞的意味の語に関して、内心構造と外心構造の文の表現形式を扱う。内心構造を表示する要素を「リンカー」、外心構造を表示する要素を「コピュラ」と呼ぶと、世界の言語は下記のいずれかに分類できる。①リンカーもコピュラもない、②リンカーはあるがコピュラはない、③コピュラはあるがリンカーはない、④リンカーもコピュラもある。「線条性」の桎梏ゆえに、連続を断ち切るためもしくは不連続を繋げるため、どの言語も一定の方略を留意しており、各言語はその言語全体の体系に応じて各々独自の手法を用いていることがわかる。

まずリンカーもコピュラも持たないタイプでは、修飾語と被修飾語の語順が基本的に決まっている。イントネーションも重要な役割を果たしている。次にリンカーやコピュラを持つ言語についてみれば次のようなことがいえるだろう。

コピュラに対してリンカーが言語によってきわめて多様な有様を示すことがわかる。

コピュラが十分に発達していない言語の場合、修飾構造の連続を断つために人称代名詞（モンゴル語など）、指示詞（インドネシア語）、程度副詞（漢語）、などが機能している例がみられた。これらは歴史的にコピュラに文法化し得る要素であると考えられる。またこれらは限定度の問題と深く関わっていることをみた。他方リンカーは、タガログ語のリンカーやペルシア語のエザーフェ、日本語の連体形、アラビア語の冠詞の一致、ロシア語の性・数・格の一致、エスキモー語の語彙的接辞、コリヤーク語の抱合などきわめて多様である。この中にはロシア語やアラビア語など、基本的に一致による同格をその統制原理とする言語と、そうでない言語の2つがあることにも注意したい。

並置の使用という観点からみれば、インドネシア語とペルシア語がもっとも対極的であるといえよう。すなわちインドネシア語ではある2つの要素を並置すれば修飾関係になりこれを断って外心構造にするためには指示詞が必要である。逆にペルシア語では並置すれば外心構造になるので、連結するためにはエザーフェが必要となる。

上記の検証に用いる文は下記である。スペイン語などでは、アスペクト的な違いによって2つのコピュラが使い分けられるが、形容詞述語文と名詞述語文の両方を訊くことはこの点の解明にもつながるものと考えている。なおラオ語の修飾構造において、形容詞の重複が観察された点が興味深い。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

- ① リンカーもコピュラもない：ダグール語、モンゴル語、ソロン語、ナーナイ語、ビルマ語、ラオ語、クメール語、ハンガリー語
- ② リンカーはあるがコピュラはない：アラビア語、ペルシア語、インドネシア語／マレーシア語、中国語、朝鮮語、グイ語、ラワン語
- ③ コピュラはあるがリンカーはない：フランス語、スペイン語、ウルドゥー語、トルクメン語
- ④ リンカーもコピュラもある：ドイツ語、フィンランド語

ここで2つの形容詞が1つの同じ名詞を修飾する際には、2つの方法が考えられるだろう。すなわち上記の例の「[新しくて厚い]本」のように、①連用形や **and** のような要素を用いて修飾句を形成し、これ全体で連体修飾を行うものと、②「[新しい [厚い本]]」のようにそのような要素を介さず、少なくとも見かけ上は2つの形容詞が重層的に修飾しているもの、である。ここで前者を一括修飾型、後者を累積修飾型と呼ぶことにする。この点について分類してみた結果は以下のものであった（なお太字の言語は形容詞動詞型の言語、そうでないのは形容詞名詞型の言語である）。

- ① 一括修飾型：インドネシア語／マレーシア語，中国語，ラワン語，朝鮮語，グイ語，フィンランド語，モンゴル語ホルチン方言，ウルドゥー語，スペイン語，ソロン語，トルクメン語
- ② 累積修飾型：ビルマ語，ラオ語，クメール語，アラビア語，ドイツ語，ダグール語，フランス語（ただし前後から），モンゴル語ハルハ方言，ハンガリー語
- ③ 両方可：ペルシア語

残念ながら特にこのように分類された言語群の間に，系統的もしくは地域的な偏りは見いだせなかった。

次に，リンカーもしくはそれに代わる要素によって示されるべき「修飾」と，コピュラもしくはそれに代わるべき要素によって示されるべき「分断」について，諸言語がどのような要素を用いていたかを整理しておく。

- ・アラビア語：冠詞の一致による修飾，冠詞不使用による分断
- ・インドネシア語／マレーシア語：まとめてから関係節により修飾，指示詞（さらにコピュラ）による分断
- ・中国語：「又」により並列し「的」により同格前置，「很」による分断
- ・ドイツ語：語尾による修飾，コピュラによる分断
- ・ダグール語：前置修飾，「とても」による分断（媒介言語の漢語の影響？）
- ・フランス語：後置修飾，コピュラによる分断
- ・フィンランド語：格の一致による修飾，コピュラによる分断
- ・ハンガリー語：前置および格の一致による修飾，イントネーションによる分断
- ・ビルマ語：名詞化したものを同格で並列，形容詞は動詞として動詞の語尾をとる
- ・朝鮮語：連体形による修飾，陳述形による分断
- ・モンゴル語：前置による修飾，イントネーションもしくは3人称所属形による分断：
- ・ウルドゥー語，トルクメン語：前置修飾，後置のコピュラによる述語化
- ・スペイン語：後置修飾，コピュラによる分断
- ・ペルシア語：エザーフェによる連結，その不使用による分断
- ・ソロン語，ナーナイ語：前置修飾，イントネーションによる分断
- ・ラオ語：重複による修飾，指示詞やイントネーションによる分断
- ・クメール語：後置修飾，指示詞による分断
- ・グイ語：関係節による修飾，格付属語による分断
- ・ラワン語：前置修飾，形容詞は動詞として動詞の語尾をとる

8. 意外性

児倉 (2015: 118) は証拠性と意外性の関連について，以下のように記している。

証拠性とされる対立には文の表わす情報と話し手の持つ既存の知識との関係が関わる場合もある。トルコ語において、**-miş** は間接経験を表す一方、話し手の既存の知識（あるいは予測）に反する情報であれば、直接経験に基づく情報にも使用することができる。そのとき **-miş** は、意外性 (mirativity) を表す。

意外性に関しては、下記の例文を用いる。なお意外性に現れる形式と、証拠性の関連についてみるためには当然証拠性に関する例文、特に間接経験の例文がなければならないが、これは本論集 16 号のモダリティ特集の例文に多く含まれているので、これに拠ることとする。

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性 (mirativity)】

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ 田中君だったな。」
【思い出し】

諸言語のデータを見てみると、[20]に対して過去形等が用いられる言語は多いが、[19]に対して過去形等が用いられる言語は少ないことが分かる。これに対し、【思い出し】では過去にそのことを思考した時点が話者の念頭にのぼるので、過去形が使われやすいのではないかと考えられる。

[19]に過去形等を用いていたのは次の言語である：ペルシア語（「なる」の過去分詞形）、トルクメン語、ウルドゥー語、ダグール語、ラワン語、ハンガリー語（完了形だが、現状の確認の意味がある）

このように【意外性 (mirativity)】に過去形等を用いる言語は、認識の時点よりもデキゴトの生起の方が先であったことを問題にする言語（言い換えれば、デキゴトより後からの認識であることを明示する）であり、その数はあまり多くないことが分かる。後からの認識は、伝聞などにも用いられる言語があり（トルコ語など）、証拠性 (evidentiality) の問題とされている。こうした証拠性が問題になる言語としては、先行研究においてアルタイ諸言語やチベット・ビルマ語族の言語、西アジアの言語などがよく取り上げられているのを目にするが、上記の言語群はまさしくそのような系統や地域の言語となっている。

その他、意外性を示す何らかの明示的要素として特筆すべきものを示しておく。

ビルマ語：終助詞 **ha**、ノダ文不使用

朝鮮語：詠嘆や気付きなどの意味がある終止形語尾の **-ney**

マレーシア語：話者の予測に反することを示す **pula(k)**

ナーナイ語：意外性を示すとりたての付属語と文末表現

ラワン語：文末小辞

次に、[20]【思い出し】における過去形等の使用をみる。

- ・「誰かに会うはずだったなあ。」の文における使用：ダグール語、フィンランド語、朝鮮語、モンゴル語、ペルシア語（接続法）、トルクメン語、ウルドゥー語、スペイン語、ハンガリー語
 - ・「誰だったっけ。」の文における使用：フィンランド語、朝鮮語、モンゴル語、ペルシア語、トルクメン語、ウルドゥー語、スペイン語、ソロン語、ラワン語
 - ・「あっ、そうだ！」の文における使用：トルクメン語、ウルドゥー語、ラワン語
 - ・「田中君だったな。」の文における使用：アラビア語、ダグール語、フランス語、フィンランド語、朝鮮語、モンゴル語、ペルシア語、トルクメン語、スペイン語、ソロン語、ラワン語
- 過去形等の使用が全く観察されなかった言語：インドネシア語／マレーシア語、中国語、ラオ語、ドイツ語、クメール語

まず過去形等の使用が見られなかった言語には、孤立型の類型を持つ言語が多く現れていることが分かる。これはこれらの言語には一般的にテンスのカテゴリーがないことから説明できるだろう。ただし中国語、ラオ語には状況の変化を示す文末形式が用いられている

他方過去形等の使用が見られた言語は、先の証拠性が問題になる言語、すなわちアルタイ諸言語やチベット・ビルマ語族の言語、西アジアの言語に加え、ヨーロッパの印欧語族の言語やフィンランド語などが現れている。ただし、これは今回調査対象となった言語の大部分でもあるので、地域や系統に偏りがあると言することは難しいだろう。

さらに特筆すべきこととしては、朝鮮語において、「誰だったっけ」の文に目撃法が使われている点である。日本語共通語の文にも古文のケリに遡るツケが使われているが、目撃から思い出しにまたがる機能的範囲を持っている点で、青森南部方言など日本の東北方言に広くみられるツキヤなどの形式と類似していることが注目される。さらにナーナイ語で「誰かに会うはずだった」の文に仮定法が用いられていることも興味深い。

今回考察した過去形等の形式に関して、それらの言語の間接経験の例文でのテンス形式と比べた考察を行うべきであるが、今回そこまで検討が進められなかった。今後の課題としたい。

9. 今後の課題や注意点

アンケートには、次の2点を特に記して注意喚起を促した。

- 1) 今回調査する諸要素の中には、言語によっては明示的な形式を持たない、あるいはイントネーションによってのみ区別される（特に焦点など）、というケースが考えられる。調査者はイントネーションにも注意し、必要と思われる場合にはできればそれについても記述する必要がある。
- 2) 疑問文も今回の調査の1つの目的である。否定疑問文の答も、英語とは異なり、ドイツ語やフランス語では Yes No のいずれの対応要素でもないものが用いられるが、こうした要素はとりたてとも関連が深いと考えられる。そのような要素にも注目したい。

マレーシア語のデータには特にピッチ曲線も示され、貴重なデータが得られたが、私（風間）自身が調査したデータも含め、イントネーションやプロミネンスの調査は不十分であり、結果の分析にも特に反映することができなかった。情報構造の研究は形態・統語と音声の研究境界領域（研究重複領域!?!）であることが、今回の諸言語のデータからもよくわかった。今後はできれば音声データも収集することや、前後の文脈等をさらに丁寧に設定することが一つの課題と言えるだろう。

2)については、[3]に否定疑問文とその答えを用意したつもりだったが、フランス語においてもドイツ語においても、予想していた *Si* や *Doch* は現れなかった。他の言語においても特に特別な形式は現れなかった。この点に関してはその出現条件を見極めるために、さらなる調査研究が必要であろう。

全般にわたって、対象とする言語データをさらに増やすとともに、情報構造全般に関しても、コピュラ文に関してもさらなる調査・研究の必要なことは言うまでもない。

参考文献

- Haiman, J. (1978) Conditionals are Topics. *Language* 54, 565-589.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂。
- 風間伸次郎（2012）「コピュラ文の諸相」影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の新展望 2 意味と構文』85-106. 東京：くろしお出版。
- 児倉徳和（2015）「証拠性」斎藤純男・田口善久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』118. 東京：三省堂。
- Lambrecht, Knud (1994) Information structure and sentence form. Topic, focus, and the mental representations of discourse referents. Cambridge: Cambridge University Press.
- 西山祐司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句—』東京：ひつじ書房
- 下地理則（2015）「焦点化と格標示」（WS「日本語方言のケースマーキングのとりたて性と分裂自動詞性」）『日本言語学会 第151回大会予稿集』396-401.
- 時崎久夫（2002）「日英語のうなぎ文」『日本言語学会 第124回大会 予稿集』84-89.